

九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事にもなう
埋蔵文化財試掘調査報告書

天神後第二遺跡	(てんじんうしろだいに)
妙見遺跡	(みょうけん)
野久首遺跡	(のくび)
平原遺跡	(ひらばる)
彦川遺跡	(ひこかわ)

1990.3

宮崎県教育委員会

九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事にもなう
埋蔵文化財試掘調査報告書

天神後第二遺跡	(てんじんうしろだいに)
妙見遺跡	(みょうけん)
野久首遺跡	(のくび)
平原遺跡	(ひらばる)
彦川遺跡	(ひこかわ)

1990.3

宮崎県教育委員会

序

宮崎県は、豊かな自然を利用して農業を中心に産業の振興を図ってきたところでありますが、交通網の不備は大きな弱点となっていました。

しかし、遅れていた交通網の整備も昭和56年の九州縦貫自動車道（えびの～宮崎間）の開通を始め、今回の人吉～えびの間の着工、あるいは東九州自動車道への期待など明るい展望がみえてきたところでもあります。

交通網の整備は産業や文化の進展にとって不可欠な条件の一つであり、その利便性については言うまでもないことですが、それに伴って失うものも少なくありません。動植物、自然景観、それに私たちの祖先が営々と築き上げてきた生活の証拠である遺跡等、失うにはあまりにも貴重なものが数多くあります。私たちは、如上の認識をもちながら、それぞれの調和を図りつつ対処してゆかねばなりません。

今回の調査は、九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設予定地間に所在する本県側5ヶ所の遺跡について、その時代や規模等について明らかにしようとする予備調査です。その結果、縄文時代や平安時代の遺跡の所在が確認されました。この調査結果が本調査において十分にいかされることを希望し、当地域の歴史解明の一助となることを期待します。

なお、最後になりましたが調査の実施にあたりご理解とご協力を賜わりました地元の方々、関係各位に心より厚くお礼申し上げます。

平成2年3月31日

宮崎県教育委員会

教 育 長 児 玉 郁 夫

例 言

1. 本報告書は、九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した試掘調査報告書である。
2. 試掘調査は、平成2年1月26日から同年3月16日まで実施した。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	宮崎県教育委員会
教育長	児玉郁夫
文化課長	久徳菊雄
課長補佐	片野坂次彦
庶務係長	小倉茂光
埋文係長	岩永哲夫
調査員	近藤 協(県教育庁文化課主任主事)
4. 本書の執筆、編集は近藤が行った。
5. 出土した遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	遺跡の位置と環境	1
第2章	調査の結果	
第1節	天神後第二遺跡の調査	4
第2節	妙見遺跡の調査	5
第3節	野久首遺跡の調査	8
第4節	平原遺跡の調査	9
第5節	彦川遺跡の調査	12
第3章	まとめ	13

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	天神後第二遺跡試掘溝配置図	4
第3図	天神後第二遺跡1. 2トレンチ土層断面図	4
第4図	天神後第二遺跡出土縄文土器実測図	4
第5図	妙見遺跡試掘溝配置図	5
第6図	妙見遺跡1. 2. 9トレンチ土層断面図	6
第7図	妙見遺跡出土遺物実測図	6
第8図	妙見遺跡出土石鏃実測図	8
第9図	野久首遺跡試掘溝配置図	8
第10図	野久首遺跡3. 4トレンチ土層断面図	8
第11図	平原遺跡試掘溝配置図	9
第12図	平原遺跡3. 4. 5. 6トレンチ土層断面図	9
第13図	平原遺跡出土遺物実測図	10

第1章 はじめに

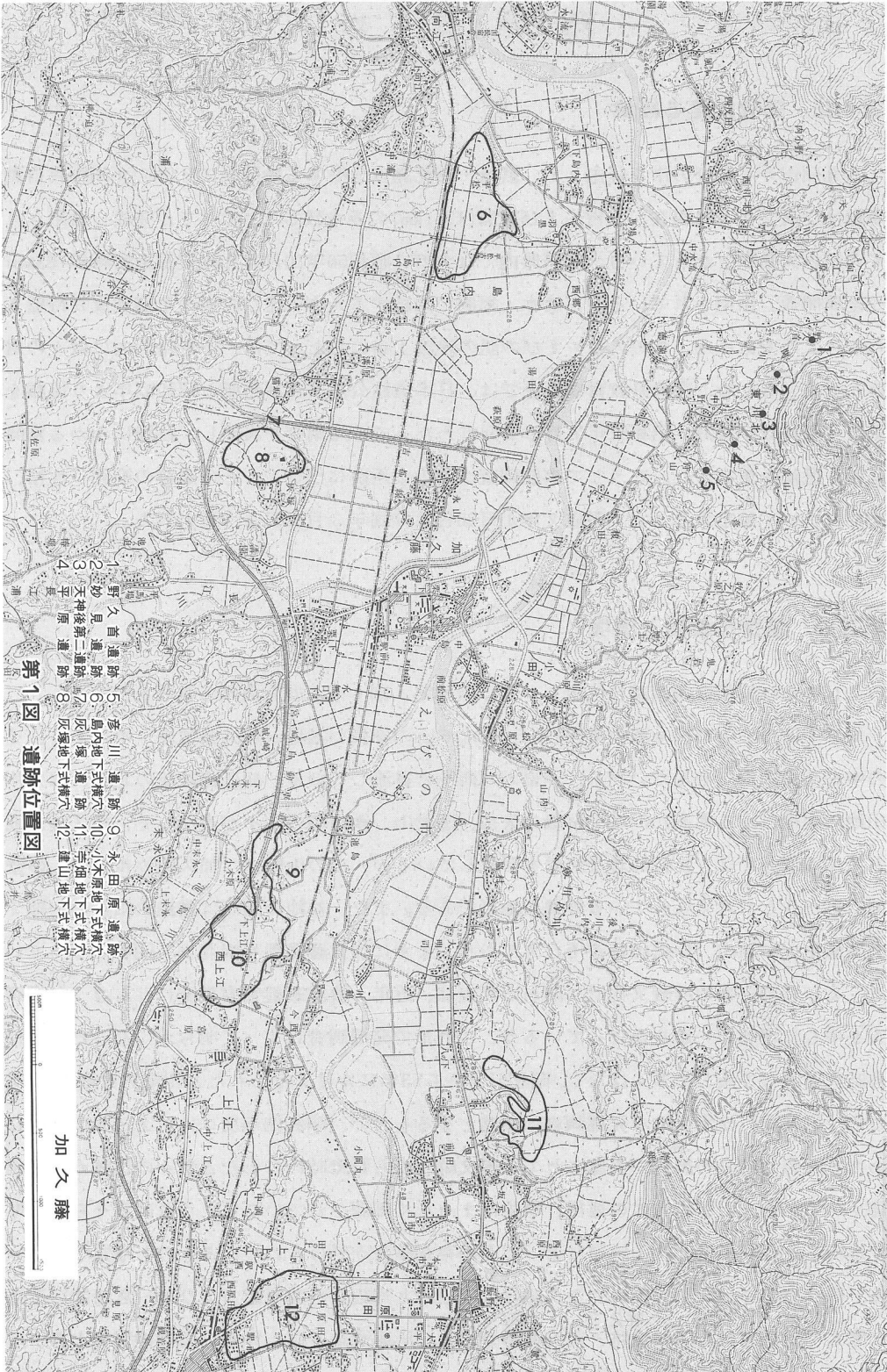
第1節 調査に至る経緯

北九州市からえびの市を經由して、宮崎・鹿児島に分岐する総延長428kmの九州縦貫自動車道は平成2年2月現在、人吉～えびの間(17.1km)のみを残して、すべてが完成し供用されて九州の大動脈となっている。宮崎県内ではすでに昭和56年10月に九州縦貫道宮崎線(83km)が全線開通、供用されているが、熊本・福岡に直結する人吉～えびの間の早期完成が待望されるころであった。この人吉～えびの間の建設工事にあたっては、予定路線内に数々の遺跡が所在するため、宮崎県教育委員会では、日本道路公団人吉事務所と昭和57年より協議を重ね、昭和57年12月、昭和61年7月の2回にわたって分布調査を実施し、路線にかかる宮崎県側5遺跡を選定した。こうして事前調査はこの5遺跡について、その遺跡の範囲、性格、時期について確定するため、平成2年1月26日より同年3月16日まで行われた。

第2節 遺跡の位置と環境

えびの市は宮崎県南西端に位置し、北に熊本県、南・西に鹿児島県と県境を接する。

地形上は市の中心部全域が東西20km、南北6kmの細長い盆地(加久藤盆地)中にあり、その中央を川内川(せんだいがわ)が東から西へと貫流している。加久藤盆地の北側には九州山地の南裾となる標高700～800m級の矢岳、国見山、鉄山等の山々が連なって、加久藤盆地と接する部分では、比較的急な斜面を形成しているが、この山壁は「加久藤カルデラ」の壁部にあたるとも考えられている特異な地形である。また、盆地の南側は霧島火山群の一部である甕岳、白鳥山、飯盛山等がそびえており、まさに加久藤盆地を南北から囲堯せしめている。えびの市一帯の埋蔵文化財に関わる調査は、近年、農業基盤整備事業にともなう発掘調査を中心に増加の一途をたどっているが、これまで発掘調査によって明らかになった遺跡は各時代を通じて決して多くはなく、昭和51年から53年にかけて行われた九州縦貫自動車道(えびの～宮崎間)が本格的な発掘調査の端緒となるもので、昭和60年度には、えびの市全域にわたる遺跡詳細分布調査^{註1}が実施されて、縄文時代から歴史時代にわたる数々の遺跡が追加確認されている。旧石器時代の遺構、遺物はまったく確認されていない。これはおそらく、厚く堆積した各期多様な火山灰層によってその存在確認が妨げられているものと推定されている。縄文土器を出土した代表的な遺跡は、前述の九州縦貫自動車道(えびの～宮崎間)工事に際して調査された灰塚遺跡^{註2}、前畑遺跡^{註3}がある。灰塚遺跡では、早期の山形押型土器、前期の轟式、その他後期では、小池原、鐘ヶ崎式系土器が、晩期では黒色磨研土器、粗製土器



第1図 遺跡位置図

- 1. 野久首遺跡
- 2. 妙天寺
- 3. 天神原遺跡
- 4. 野久首遺跡
- 5. 彦川遺跡
- 6. 島内地下式構穴
- 7. 反環遺跡
- 8. 灰塚地下式構穴
- 9. 永田原遺跡
- 10. 小本原地下式構穴
- 11. 室田地下式構穴
- 12. 鎌山地下式構穴

加久藤

など、中期を除く各時期の土器が遺構にはともなわないものの少量出土している。また、前畑遺跡では早期の塞ノ神式をはじめとして前期の曾畑式、轟式、さらに後期になると南福寺式、出水式系土器や小池原式、綾式、市来式系等の南九州地方、西北九州地方の土器が入り乱れて出土しており、内陸部に位置する当地方の地域性を端的に表わしている。このように縄文時代の遺跡は中高位段丘面を中心に点在するが、当地域を代表するような遺跡はまだ知られていない。弥生時代の遺跡は、飯野、加久藤地区で後期の遺跡12ヶ所あまりが知られているが、前期の遺跡は未だ知られていない。ただ、中期の遺跡は、先の遺跡詳細分布調査^{註4}によって1ヶ所確認されている。弥生時代の遺跡で発掘調査された遺跡には永田原遺跡があり、当地域では初めて住居跡等関連遺構が検出されている。確認された住居跡は、その内部中心に向かって入りこむ細長い突出した張り出しがあり、住居内を数区画に割り切っている。その形状から、花卉状住居と呼称されるものであるが、永田原遺跡での発見によって、この突出壁を有する住居跡の分布域の西限がいきなり拡大されることとなった。以上のように弥生の遺跡は、低位段丘部を中心に中、高位段丘部にのっている。

えびの地方の遺跡を代表するものは、むしろ地下式横穴古墳であろう。当地区は、えびの・大口市圏を中心とする第3地域に区分され、地下式横穴墓と板石積石室墓の共存が認められる。また、地下式横穴もその構造が平入りの長方形プラン、あるいは楕円形プランに限られるという特色をもち、その検出基数も数多く、小木原地下式横穴群^{註5}だけをみても300基を越えるほどである。その分布地は、川内川本流域と支流の段丘砂礫地に営まれ、大きく六群（島内・灰塚・小木原・苧畑・建山・杉水流）が確認されている。

古代日向国の「駅」もえびの地方に比定地がある。西都市の日向国府から5番目の「真祈駅」がそれであり、大字灰塚字真崎にあてられている。先の永田原遺跡の「長」の字を坏底に記した墨書土器や法光寺跡出土の布目瓦、高台付碗等、この時期にかかわる遺物も増加しつつある。

註1. 『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』 えびの市教育委員会・1985

註2. 『灰塚遺跡』 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2) 宮崎県教育委員会・1973

註3. 『前畑遺跡』 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(3) 宮崎県教育委員会・1979

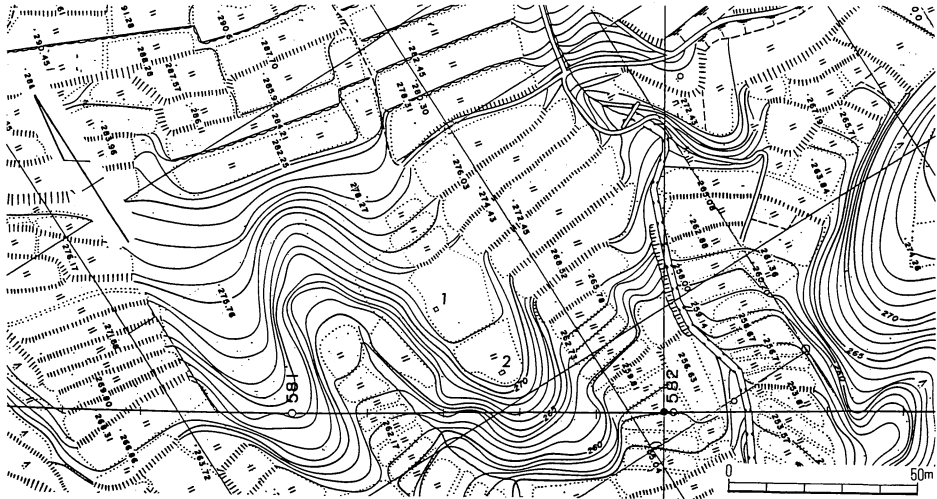
註4. 『永田原遺跡』 上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要
えびの市埋蔵文化財調査報告書第2集 えびの市教育委員会・1987

註5. 『小木原遺跡群・蕨地区』 上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要
えびの市埋蔵文化財調査報告書・第3集 えびの市教育委員会・1988

『小木原遺跡群・蕨・久見迫・地主原地区』上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要
えびの市埋蔵文化財調査報告書・第3集 えびの市教育委員会・1989

第2章 調査の結果

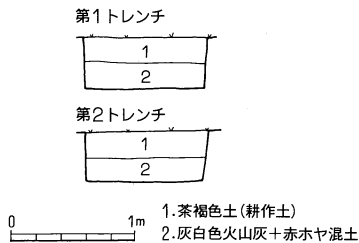
第1節 天神後第二遺跡の調査(えびの市大字東川北字天神元)



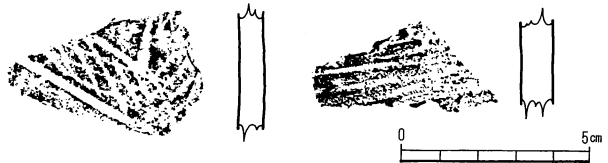
第2図 天神後第二遺跡試掘溝配置図

平原遺跡と妙見遺跡の中間地にある。当遺跡から西側上位には、えびのループ橋がとりまく岡山(511.88m)がそびえ、それを仰ぎ見る位置にある。地形的には妙見遺跡と同様、岡山から東に比較的急に傾斜する段丘地形を呈しているが、妙見遺跡に比較して段丘の平坦面が、約800㎡と小規模な舌状地形となっている。

作物の関係上、1.0m×1.0mの規模の小トレンチ2本を設定したに留まる。両トレンチとも、約20cmの耕作土直下がすでに段丘堆積物と想定される明黄褐色粘質土となり、赤ホヤ火山灰層上位の火山性堆積物層はすでに無い。赤ホヤ火山灰は、第2トレンチの2層において小ブロックでみられるので、本来は遺存したものと考えられるが傾斜地形のため流出したか、あるいは開墾による人的削平により失われている。耕作土中より貝殻条痕文土器、塞ノ神式土器2点が出土した。

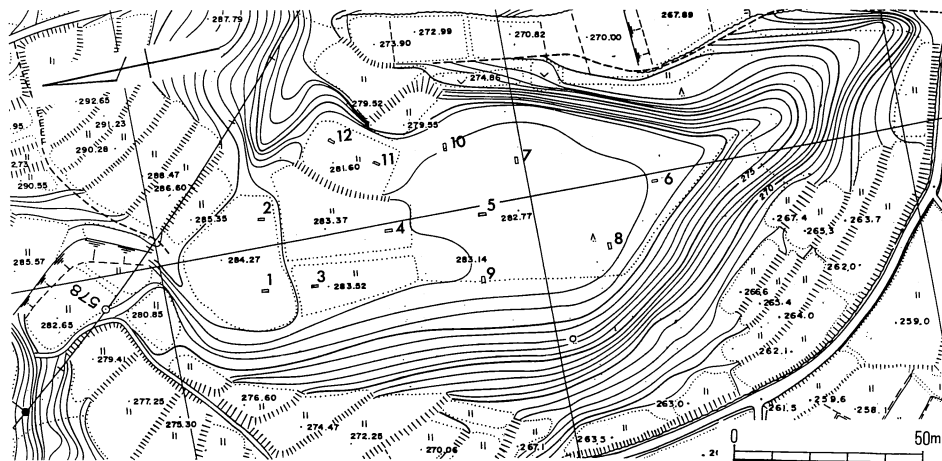


第3図 天神後第二遺跡1、2トレンチ土層断面図



第4図 天神後第二遺跡出土縄文土器実測図(1/2)

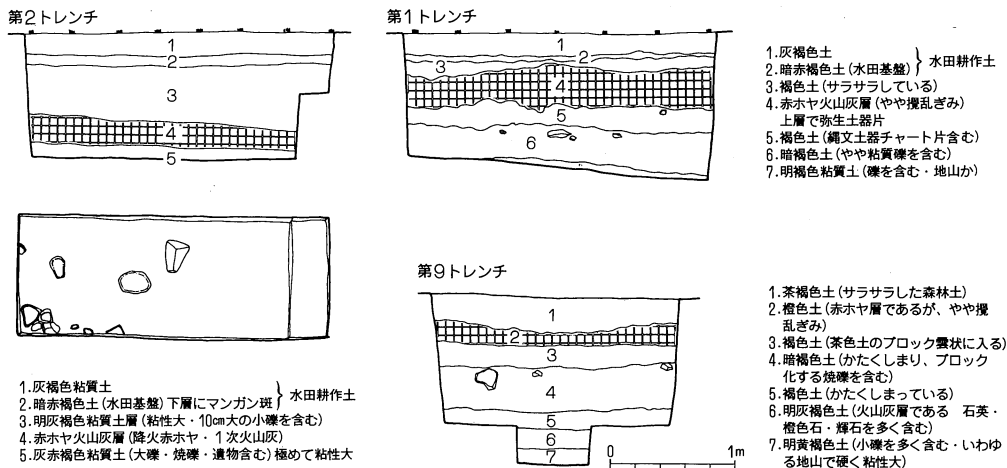
第2節 妙見遺跡の調査(えびの市大字東川北字妙見)



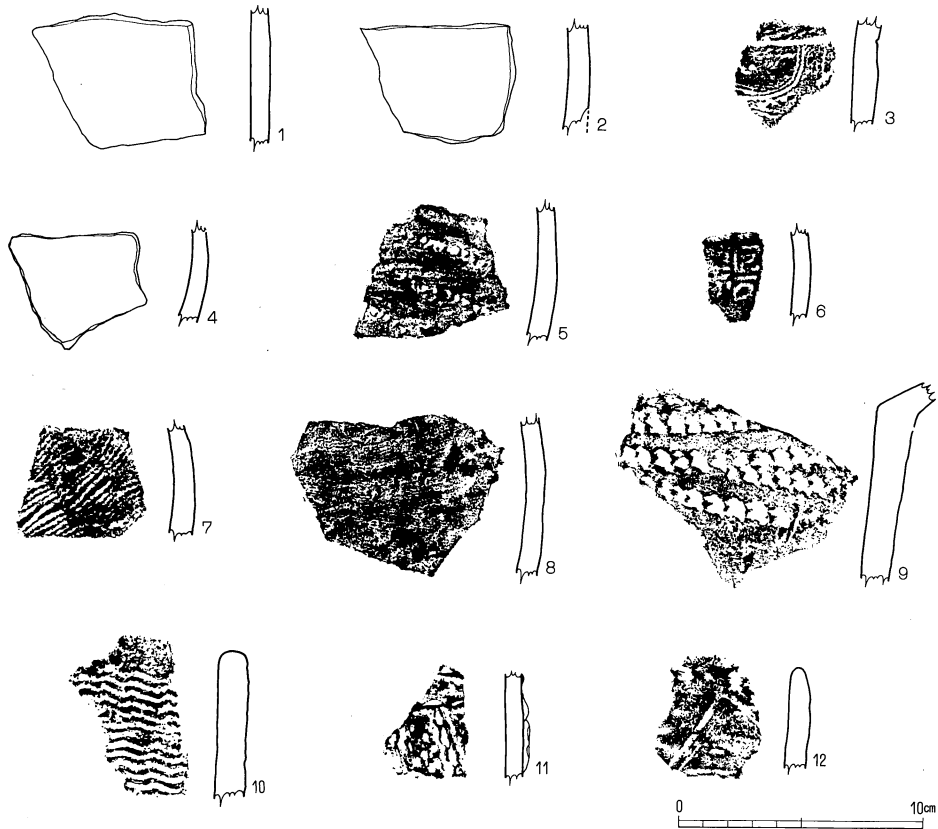
第5図 妙見遺跡試掘溝配置図

遺跡は、標高511mの山陵(通称・岡山)から緩やかに南東へ向けて舌状に広がりながら傾斜する標高283~285mの段丘(高位段丘面)上にある。その段丘東側と西側にはそれぞれ比高11.0m、10.0mの細長い谷が入り組んで、小規模ながら尾根と谷が次々に続く複雑な地形をみせている。最寄りの遺跡は小さな谷を3ヶ所隔てた西300mに天神後第二遺跡がある。なお、南面する低位面との比高は約30mである。

調査対象地は約5,700㎡あり、中部より南側半分が山林(杉林)、北側半分が約7筆からなる段差のある水田であり、高位面と最低位面との比高は約3.0mである。



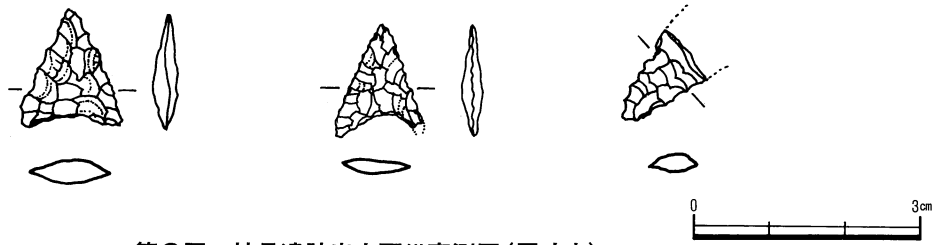
第6図 妙見遺跡1. 2. 9トレンチ土層断面図



第7図 妙見遺跡出土遺物実測図(1/3)

図面 番号	遺物 番号	出土 トレンチ	種別	器形	調整(文様)		胎土	焼成	色調		備考		
					内面	外面			内面	外面			
7	1	1	弥生土器	甕/壺	ナ	デ	ナ	デ	石英、角閃石、 砂粒を多く含む	良好	明黄褐 Hue10YR7/6	にふい黄橙 Hue10YR6/4	スス付着
7	2	1	弥生土器	甕/壺	ナ	デ	ナ	デ	石英、角閃石、 茶砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 Hue10YR8/4	浅黄橙 Hue10YR8/4	
7	3	1	縄文土器	深鉢	粗いナデ	沈線			石英極微粒、砂粒、 白色石含む	良好	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue7.5YR6/6	塞ノ神式
7	4	1	弥生土器	甕/壺	丁寧なナデ	ミガキのあと 朱塗			石英極々微粒含む	良好	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue7.5YR7/6	朱塗
7	5	5	縄文土器	深鉢	ナ	デ	ナデのあと 刺突列点文		白色石、石英、 砂粒を多く含む	良好	にふい橙 Hue7.5YR6/4	橙 Hue7.5YR6/6	
7	6	5	縄文土器	深鉢	風化不明	角形同心文 押型文			白色石、石英微粒、 茶色砂粒	良好	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue7.5YR6/8	押型文、風化磨 耗している
7	7	6	縄文土器	深鉢	ナ	デ	細い撫糸文		石英極々微粒含む	やや軟	淡黄 Hue2.5YR8/4	淡黄 Hue2.5YR8/4	
7	8	6	縄文土器	深鉢	粗い擦痕	ハケメ様の 擦痕			白色石、石英、 砂粒含む	良好	明黄褐 Hue10YR	橙 Hue5YR6/8	
7	9	9	縄文土器	深鉢	ヨコ方向 粗いナデ	3条の貝殻 腹縁文列			石英、角閃石微粒、 砂粒	良好	明黄褐 Hue7.5YR5/6	明黄褐 Hue2.5YR5/6	塞ノ神式
7	10	9	縄文土器	深鉢	ナ	デ	山形押型文		砂粒、石英粒多く 含む	良好	にふい褐 Hue7.5YR5/3	褐灰 Hue7.5YR5/1	
7	11	10	縄文土器	深鉢か	ナ	デ	微隆起線 微隆起刻線		石英極々微粒含む	良好	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue7.5YR6/6	
7	12	10	縄文土器	深鉢か	粗いナデ 凹凸あり	ナデのあと 沈線文			石英、角閃石微粒	良好	明黄褐 Hue7.5YR5/6	明黄褐 Hue10YR6/6	

(表1) 妙見遺跡出土遺物観察表

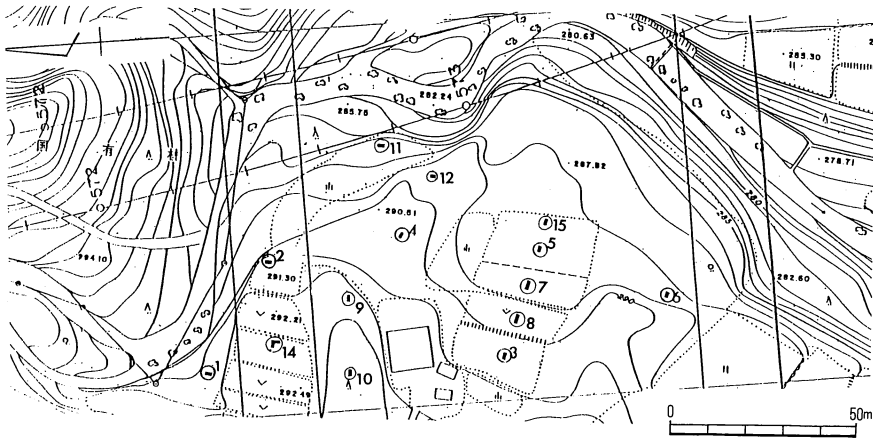


第8図 妙見遺跡出土石鏃実測図(原寸大)

試掘溝は水田面に1.1m × 2.5m 規模のトレンチ6本(1. 2. 3. 4. 11. 12)、山林面に1.0m × 1.8m 規模のトレンチ6本の合計12本を設定した。水田面は、北端と南端では約3.0mの高低差をもっているが、開田の折に、切り盛りによる若干の作事が行われたことが土層観察の結果明らかであり、各トレンチで二次的な土壌攪乱層が確認されている。しかし、それでもプライマリー層は、水田面では高位面を中心に、山林面ではほぼ全域に残存していた。水田面でのプライマリー層は、赤ホヤ火山灰層より始まるが、一次赤ホヤが明確に残っていたのは2トレンチのみで、他はやや濁った二次的な様相であった。赤ホヤ火山灰層直下は、褐色～明灰褐色粘質土となり、この層に2トレンチにおいて赤褐色に焼けた礫、黒曜石のチップが検出された。小規模な集石遺構の一部であるとおもわれる。1トレンチの赤ホヤ火山灰直下層である第5層からは、二重沈線と撚糸文で構成された縄文土器、黒曜石製チップが出土した。第5層の下層(6層)は、小礫を含むやや粘質で硬い暗褐色土となるが、遺物は包含しない。第7層は、これも小礫を多く含む明褐色粘質土となり、これがいわゆる地山にあたる礫層であるとおもわれ、むろん無遺物層である。1トレンチの攪乱のみられる赤ホヤ火山灰直上層からは、弥生土器の小破片が出土しているが、柱穴等の遺構は検出していない。弥生の遺構は、削平により失われている可能性が高い。

山林面での赤ホヤ火山灰層は、ほとんどのトレンチで濁りのある二次的堆積層であったが、10トレンチのその層中より縄文土器の小片が1点出土している。遺物を包含する層位のほとんどは、ここでも赤ホヤ火山灰層直下の黒褐色土層であり、とくに黒曜石製チップが各トレンチから数多く出土した。土器では、貝殻文系塞ノ神式、山形押型文土器、条痕文土器、無文土器等の早期土器がみられる。明確な遺構は検出していないが、5. 6. 7. 8. 9. 10トレンチにおいて焼礫を検出している。しかし、これは集石遺構といえるほどの密集度がなく、散漫なものである。調査地の東側は緩い斜面になっているが、7トレンチ付近では上層がかなり削平されており、表採によって数十点の黒曜石製チップが採集された。

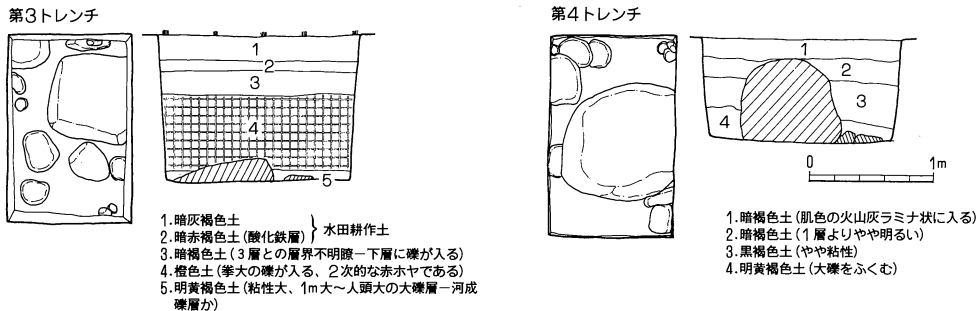
第3節 野久首遺跡の調査(えびの市大字東川北字野久首)



第9図 野久首遺跡試掘溝配置図

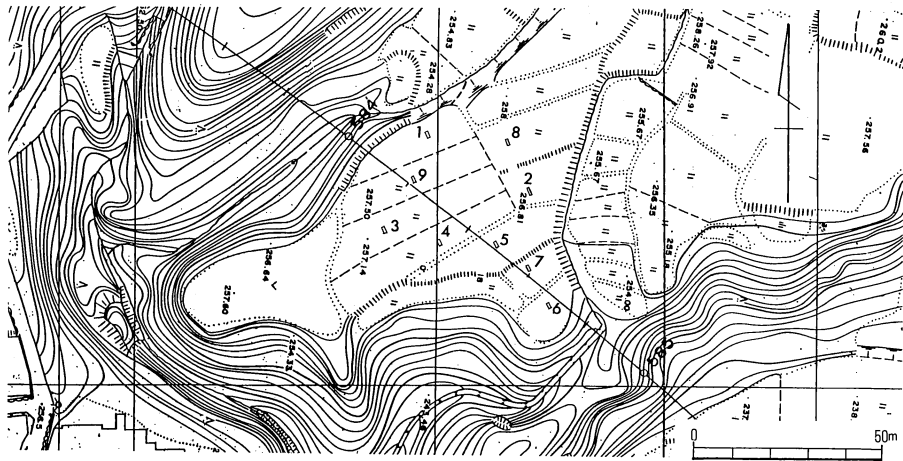
妙見遺跡から南東400mにあつて、百貫山(692m)と国見山(860m)間を開析する関川の右岸に位置する。5遺跡のなかで最北端にあり、高位(290m)から関川に向けて緩やかに傾斜する河岸段丘地形約8,400㎡である。野久首遺跡の関川対岸には、比高13.0mの高位に市道牧ノ原・彦山線が南北に通っている。現況は、調査地北半分が山林と荒地、南側が水田、荒地、山林である。

試掘溝の設定可能な地点15ヶ所について調査している。表土下、人頭大以上の巨礫となるトレンチがほとんどで、低位面(2・4・5・6・7・8・11・12・15トレンチ)については遺物の出土もなかった。調査地は過去の表層(河原礫層)と推定される。高位面(1・9・10・14トレンチ)では二次赤ホヤの遺存する地点があり、本来の遺跡中枢からすると周辺部に位置するものとおもわれるものの、第14トレンチにおいて弥生～古墳時代にかけての甕型土器片約半個体分が出土している。これによって、調査区の西北部約2,500㎡の範囲において、遺構の遺存が推定される。



第10図 野久首遺跡3. 4トレンチ土層断面図

第4節 平原遺跡の調査(えびの市大字東川北字平原)

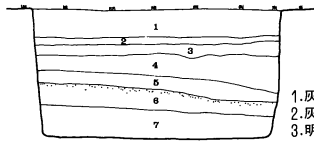


第11図 平原遺跡試掘溝配置図

遺跡は、東側山陵から緩やかに西へ延びる平均標高約 255 m の舌状をした低丘陵性台地であり、北側に狭い谷、南側にも彦川遺跡と当遺跡とを分断する北側よりやや広い谷が東西に入っている。また、その谷部と遺跡面との比高は約20m ある。

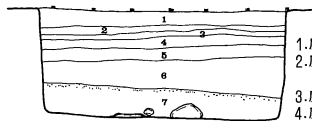
平原遺跡の広がり、地形によって推定する範囲では南北160m、東西80mに及ぶものであるが、調査対象地区は自動車道建設予定地に包含される約 3,900 m² となり、その部分は遺跡の中核からは南にややずれる位置にある。

第3トレンチ



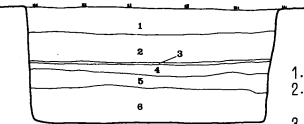
1. 灰色粘質土 (現耕作土)
2. 灰黄色粘質土
3. 明灰色粘質土
4. 灰褐色粘質土 (酸化鉄斑多し)
5. 灰色粘質土
6. 灰褐色粘質土 (上部層は黒褐色マンガン斑)
7. 明黄褐色粘質土 (遺物包含層である)

第5トレンチ



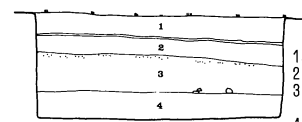
1. 灰色粘質土
2. 灰褐色土 (1層を基本とするが酸化鉄混)
3. 灰色粘質土 (1層によく似る)
4. 灰黄粘粘質土 (タテ方向の酸化鉄系状斑)
5. 灰黄粘粘質土 (3層よりさらに酸化鉄系状斑が大) となる・マンガン小斑有
6. 灰黄色粘質土 (黄色の粘性小ブロック含む)
7. 黄灰色粘質土 (小礫を多く含みザラザラしている) 上層に5.0mm大のマンガン斑多く含む

第4トレンチ

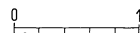


1. 灰色粘質土
2. 明灰黄色粘質土 (酸化鉄系状斑多し)
3. 黄灰色粘質土
4. 灰褐色粘質土 (マンガン斑)
5. 暗灰褐色粘質土 (遺物包含層)
6. 明黄褐色粘質土

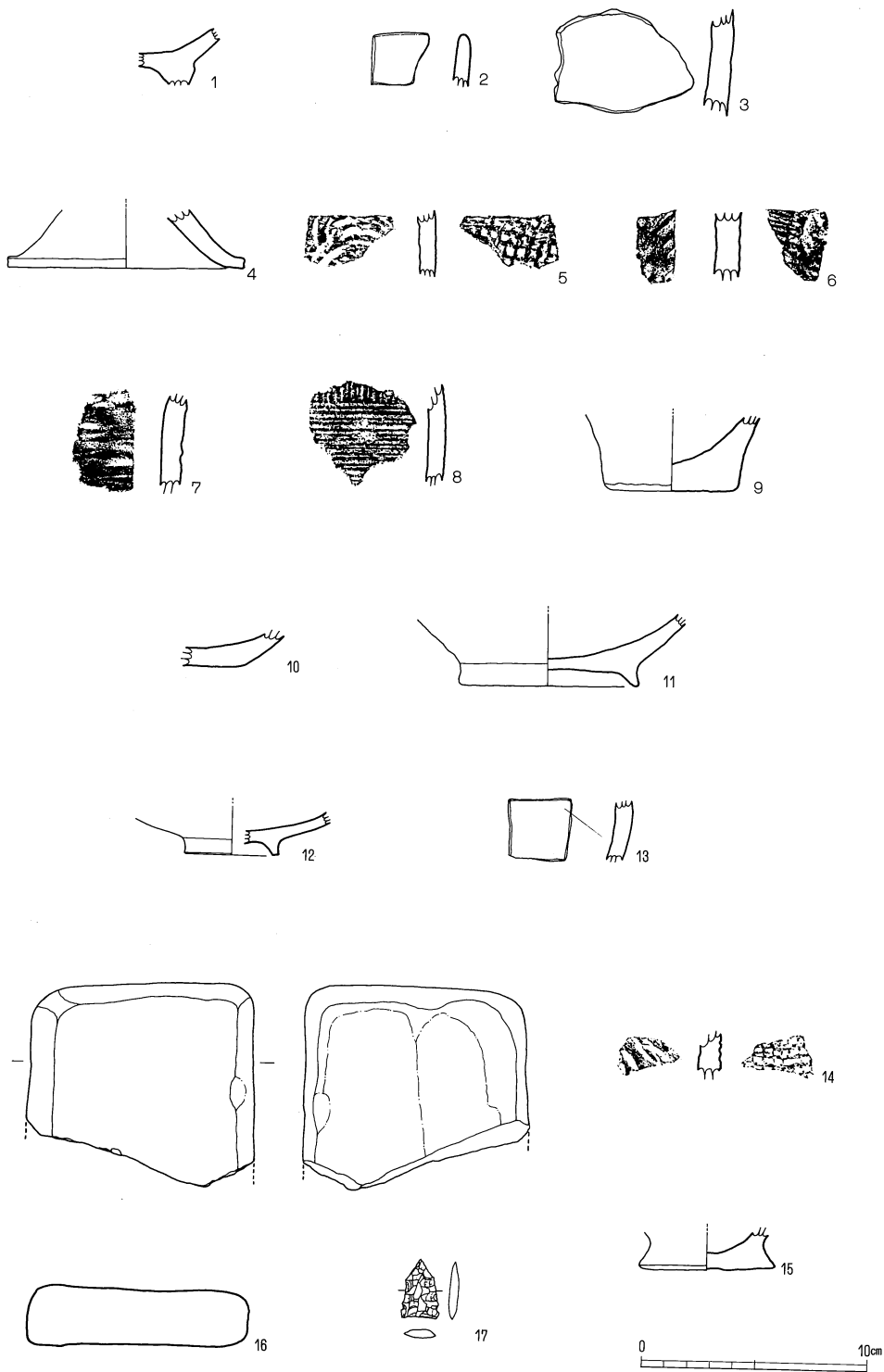
第6トレンチ



1. 灰色粘質土 } 水田土
2. 灰黄色粘質土 } 稀に5cm大の礫含む
3. 灰白褐色粘質土 } 黄色小ブロック含む
4. 赤褐色粘質土 (粒子均一・ザラザラする)



第12図 平原遺跡3. 4. 5. 6トレンチ土層断面図



第13図 平原遺跡出土遺物実測図(1/3)

調査地の現況は、最下位水田から最上位水田までの比高約4.0mの段差がある約9筆の不定形状の水田である。試掘溝は長さ2.0m、幅1.0mを基準として、合計9本設定している。

土層の堆積状況は、基本的には地形に沿って南側の下っているが、その土質は表土面から試掘確認し得た最下層まですべて極めて粘性の強い土壌、むしろ粘土とするのが適当なもので、人為的な作事の結果である水田土壌はともかくとして、それ以下の遺存する基本層位は段丘堆積物（加久藤層群）で占められている。

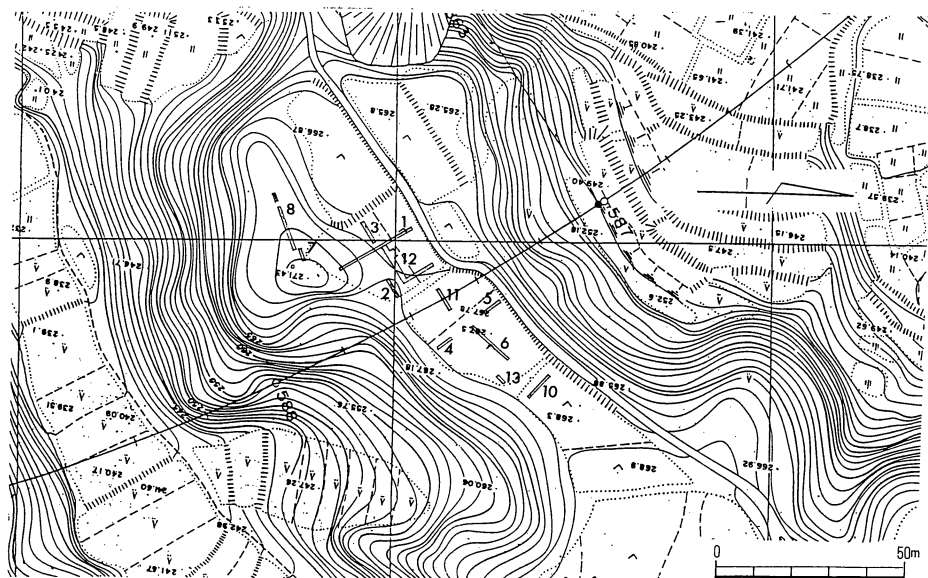
土層観察において指標となる赤ホヤ（Ah）は、いずれのトレンチにおいても確認されていない。しかし、赤ホヤ火山灰は、最上位水田面近くの谷部崩壊壁において一部粒状、ブロック状に確認しており、本来はこの丘陵上にものっていたものとおもわれるが、水田開墾時の改変等によって喪失したものと考えられる。なお、深層基盤は数メートル、あるいは数十メートルに及ぶと推定されるシラス（入戸火砕流堆積物、約21,000y.B.P）である。

水田耕作は、現行水田面をいれて二時期にわたる層位が確認された。下層水田面を第1期とすれば、それはおそらく、最初の水田開墾時の人為的作事と考えられる第5トレンチ検出の礫片によって想定されるのであるが、その時期を特定するだけの遺物を欠いている。しかしそれは考古学的対象になり得るか疑わしい現況水田に近い時期にあてられよう。

9ヶ所設定したトレンチのうち、第2トレンチでは、遺物を含む暗灰褐色粘質土を埋土とする落ち込みの一部を検出しているが、遺構の種別は特定し得ない。他は3、8、9トレンチで確認された幅20cm内外の褐色粘質層の遺物包含層である。これら遺物包含層は、現表土面から平均して60cm下位にある。

遺物は、ローリングを受けた細片が多いが、第2、3トレンチ層、6層出土の遺物には比較的大破片が多い。縄文土器（早期）、弥生土器（時期不詳）、土師器（平安）、須恵器、陶磁器、黒曜石、チャート片が出土している。このうち、土師器の出土比率が高い。

第5節 彦川遺跡の調査(えびの市大字東川北字彦川)



第14図 彦川遺跡試掘溝配置図

遺跡は、北側から約200mにわたって細長く南に延びる標高270mの段丘舌の先端部(標高268m)に位置する。遺跡の東西幅は最狭部で30mと狭く、東面は急激に落ち、比高30mで狭い谷が入り組み、西面も同じく約20m落ちて谷部となる。遺跡から西300m眼下に平原遺跡を眺望する位置にある。調査地は、工事予定地の約2,500㎡である。調査地の南端は、付近より約4m高い小頂となっている。1.0m×3.5mから1.0m×10.0mに及ぶ試掘溝を13本設定している。小丘状地となっている第7・8トレンチでは薄い表土(約10~15cm)の直下がすぐに段丘堆積物(粗い明黄褐色砂土)となっており火山灰層の遺存はみられない。他の試掘溝では二次的堆積による赤ホヤが極一部を除いて全面に遺存していたが、その上層、下層において遺物の包含はこれもみられなかった。1層(耕作土)と2層(二次的赤ホヤ)の層界が極めて明瞭であることから推定すれば、2層上面においてある時期に大規模にカットされた可能性が大である。

当遺跡のような地形において、赤ホヤ火山灰直下において検出されることの多い焼礫群も本調査区では全くみなかった。

第3章 ま と め

今回、調査を実施した地点はえびの市によって昭和60年度に実施された遺跡詳細分布調査によって、すでに遺跡として周知された2ヶ所を含む5地点である。

当初予想されたように、丘陵本体から舌状にのびて平坦面を形成する遺跡（妙見、平原）は、出土遺物によって縄文早期を主体とする遺跡であると判断された。そのうち平原遺跡では、縄文早期のほか10世紀代の文化層も遺存している。しかし、それはさらに高位に予見される主要な遺構本体から二次的に移動、堆積した可能性をもしめし、調査対象地点は遺跡の周辺部に位置するものと考えられる。妙見遺跡は調査区全域が遺跡範囲と符合していることから、その中枢域と周辺域を同時に明らかにすることのできる数少ない遺跡のひとつになる。比較的急な傾斜地に展開する天神後第二遺跡は、近隣の耕地がそうであるように、大幅な人為的削平をうけており、文化層はすでに失われている。関川の右岸に立地する野久首遺跡は、土層観察から関川の氾濫原に相当する部位に立地するものとおもわれ、低位段丘の調査対象地においてはならん遺構、遺物の出土はなかった。関川に向かって緩傾斜のはじまる高位面の一部においてのみ遺物の出土をみたために、遺跡の主要部は今回の調査区から西側にひろがる平坦面に想定される。

図面 番号	遺物 番号	出 土 トレンチ	器 種	器 形	調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					内 面	外 面			内 面	外 面	
13	1	2	土 師 器	高台付碗	風 化	風 化	細かな砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 7.5 YR8/3	左に同じ	
13	2	2	土 師 器	坏 / 碗	ナ	デ ナ	きめ細かい	良好	にぶい橙 7.5 YR7/3	浅黄橙 7.5 YR8/4	
13	3	2	縄文土器	(甕)	ヨ コ ナ	デ	丁寧なナデ	良好	灰 褐 5 YR6/2	灰 褐 5 YR5/2	
13	4	2	弥生土器 土 師 器	高 坏	粗いナデ	丁寧なナデ	きめ細かな砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10 YR8/3	浅黄橙 10 YR8/4	外面に朱塗
13	5	2	須 恵 器	——	円弧状タタキ	格子目タタキ	精	良	灰 白 N7/0	左に同じ	
13	6	2	須 恵 器	——	円弧状タタキ	平行タタキ	精	良	灰 白 5 Y8/1	灰 白 5 Y7/1	
13	7	3	縄文土器	甕	ヨ コ ナ ナナメ	太い条痕	やや粗い 砂粒を少し含む	良好	橙 7.5 YR6/6	にぶい橙 7.5 YR6/4	
13	8	3	縄文土器	甕	ヨ コ ナ	タテ 沈線 ヨ コ	やや粗い・砂粒・ ときに6mm大	良好	灰 褐 7.5 YR5/2	灰 褐 7.5 YR4/3	
13	9	3	弥生土器	甕	ナ	デ	風化(ナデ?)	粗い・砂粒含む	にぶい褐 7.5 YR6/3	浅黄橙 10 YR8/4	
13	10	3	土 師 器	坏	ナデ(内黒)	風 化	やや粗い 細砂粒含む	良好	褐 灰 10 YR4/1	浅黄橙 10 YR8/3	内黒土器
13	11	3	土 師 器	高台付碗	ナデ(内黒)	風 化	きめ細か 砂粒を含む	良好	黒 褐 10 YR3/1	浅黄橙 10 YR8/3	内黒土器
13	12	4	陶 器	皿	施 釉	高台内まで施 釉 盪付露胎	精	良	灰 白	左に同じ	
13	13	4	弥生土器 土 師 器	——	風 化	ナデ(風化)	きめ細か	良好	浅黄橙 7.5 YR8/4	左に同じ	
13	14	8	須 恵 器	——	円弧状タタキ	格子目タタキ	精	良	良好	明青灰 5BG7/1	暗青灰 10BG4/1
13	15	8	土 師 器	坏	ナ	デ ナ	ナデ(風化)	細砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10 YR8/3	左に同じ

(表2) 平原遺跡出土遺物観察表

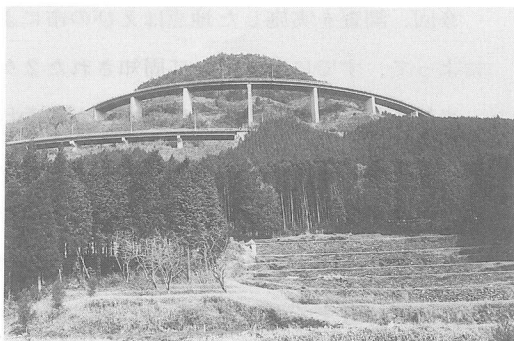
図面 番号	遺物 番号	出 土 トレンチ	器 種	石 材
13	16	12	砥 石	細粒砂岩
13	17	3	打製石鏃	チャート

石器

図版 1



天神後第二遺跡(北から)



遺跡よりえびのループ橋を見る



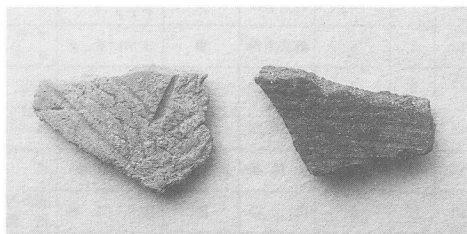
近 景 (南から)



第1トレンチ

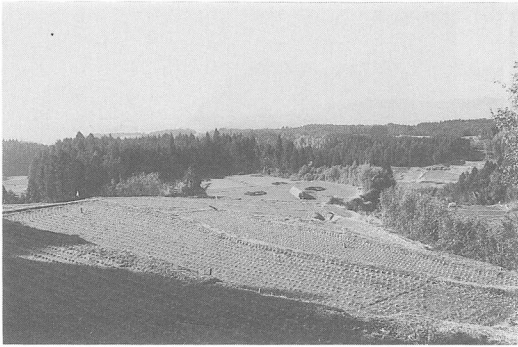


第2トレンチ

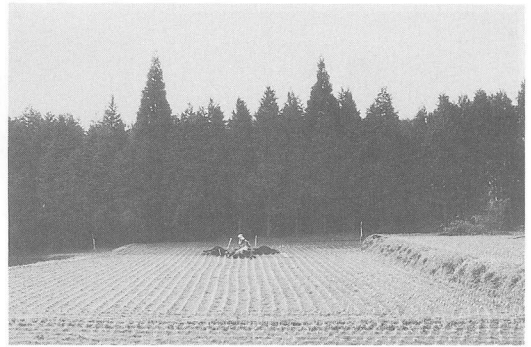


縄文早期土器

天神後第二遺跡



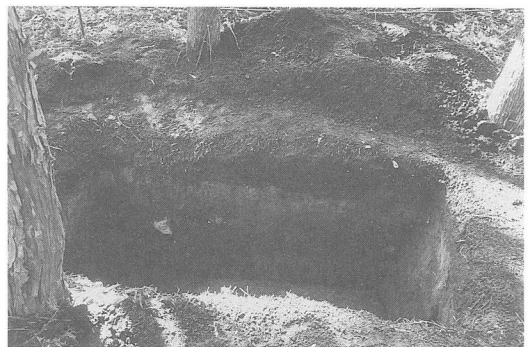
妙見遺跡全景(北から)



発掘風景(第4トレンチ)



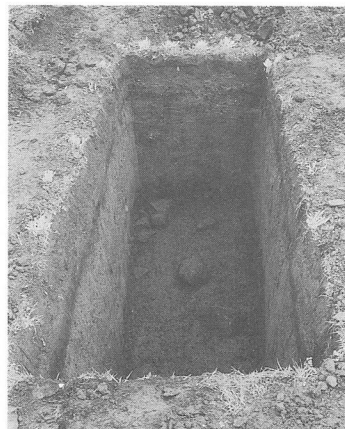
第4トレンチ



第5トレンチ



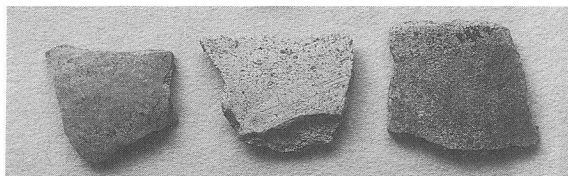
第9トレンチ



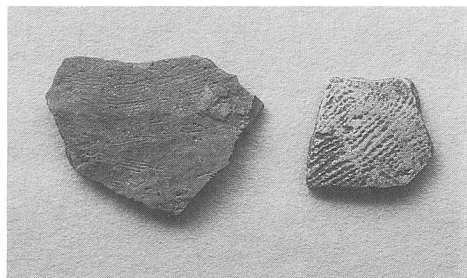
第2トレンチ

妙 見 遺 跡

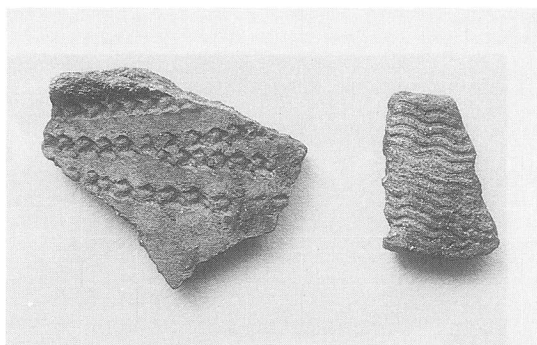
図版 3



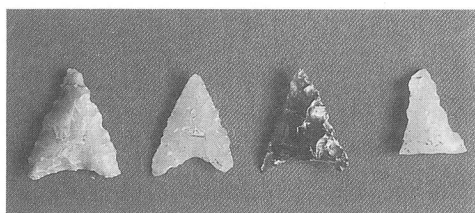
弥生土器 (6図4.2.1)



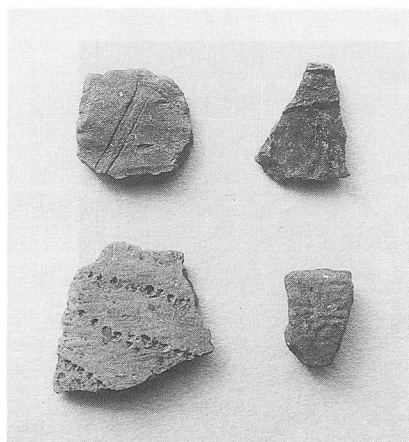
縄文土器 (6図8.7)



縄文土器 (6図9.10)



打製石鏃 (第8図1.2.3)

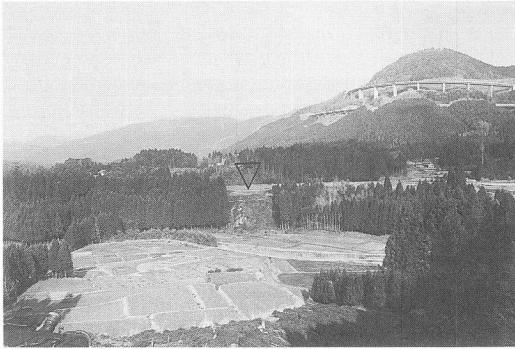


縄文土器 (6図12.11.5.6)



黒曜石製細片

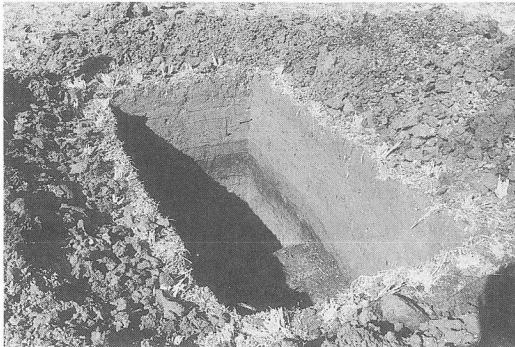
妙見遺跡出土遺物



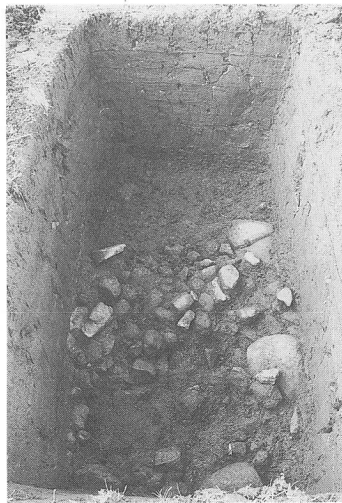
平原遺跡 (彦川遺跡から遠望)



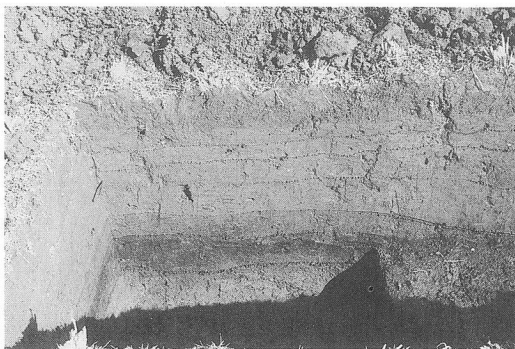
平原遺跡



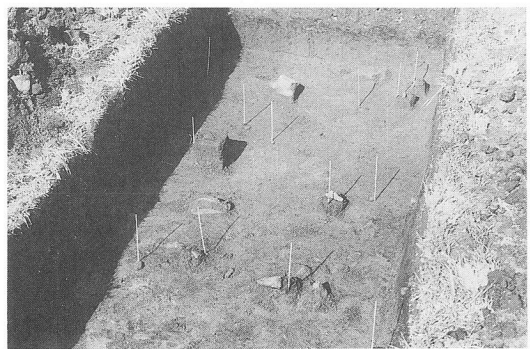
第3トレンチ



第5トレンチ



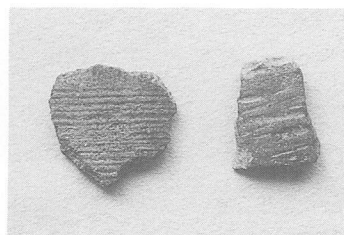
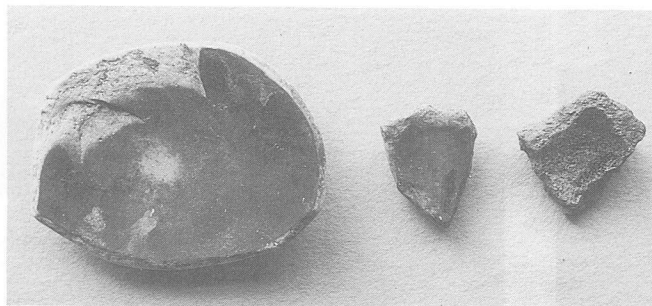
第3トレンチ土層断面



第8トレンチ

平 原 遺 跡

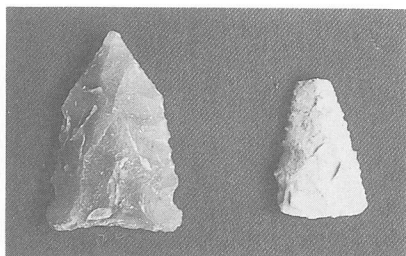
図版 5



第3トレンチ (縄文土器)



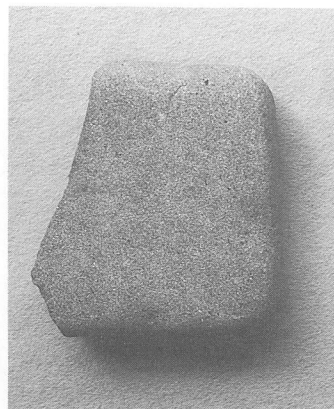
第3トレンチ出土遺物 (内黒土器)



第3トレンチ (打製石鏃)



第2トレンチ出土遺物 (土師器・須恵器他)



第8トレンチ (砥石)

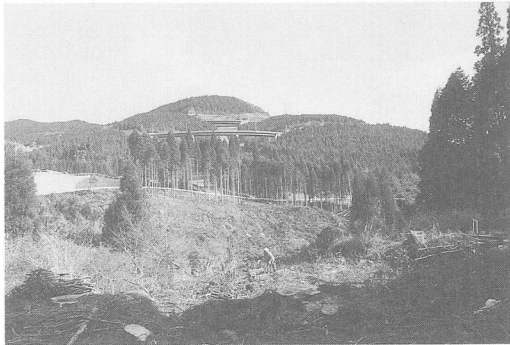
平原遺跡出土遺物



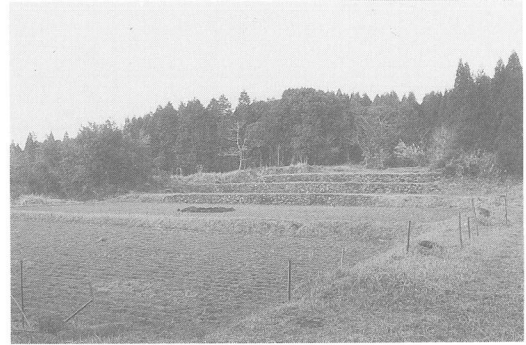
彦川遺跡遠景



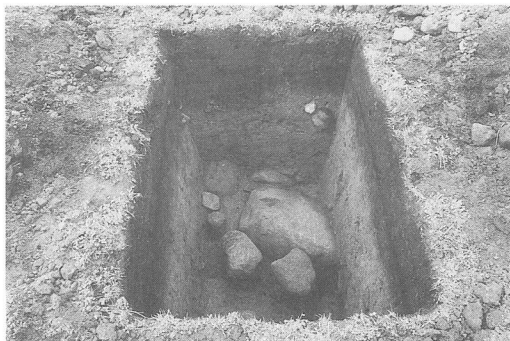
彦川遺跡近景



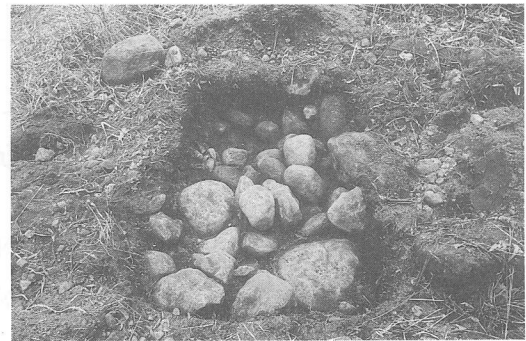
野久首遺跡(北から関川、ループ橋を眺む)



野久首遺跡(南側水田部)



野久首遺跡(第5トレンチ)



野久首遺跡(第4トレンチ)

彦川遺跡・野久首遺跡

九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事にもなう
埋蔵文化財試掘調査報告書

発行年月日 平成2年3月31日

編 集 宮崎県教育庁文化課

発 行 宮崎県教育委員会